様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23 年　5 月　9 日現在

機関番号：10101
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2008　～2010
課題番号：20520001
研究課題名（和文）信の哲学―ヘレニズムとヘブライズムの絆

研究課題名（英文）　Philosophy of Faithfulness-Vinculum between Hellenism and Hebraism

研究代表者
千葉　惠　　（CHIBA　KEI）
北海道大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：30227326

研究成果の概要（和文）：信の哲学は信じる者にも信じない者にも共約的な次元において信が魂の根源語であることを証明する企てである。パウロ「ローマ書」は哲学的分析を許す次元を持っており、意味論的分析および心身論による分析を遂行し、有意な結果がでた。パウロはそこに眼差しを注ぎ言語を紡ぎだす三つの実在と三つの対応する言語網を無矛盾な仕方で構築していたことを証明した。

研究成果の概要（英文）：I have treated Apostle Paul as a philosopher.　I have examined Paul's Epistle to the Romans from the semantic point of view and also analyzed his mind-body theory.　I have argued that he is free of contradiction in his Epistle by sorting out three stories of reality and their correspondent language networks.　Two are the righteous man and the sinner in front of God and one is the possible being for both righteous and sinful man in front of Man.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：ギリシア哲学
科研費の分科・細目：哲学・倫理学
キーワード：信、認知的卓越性、人格的卓越性
共約性、信仰義認論、意味論、心身論

１．研究開始当初の背景

パウロ「ローマ書」の一見矛盾した言明も言語が指示する実在の層が異なり、それに対応する言語層が少なくとも三層あることに気づき、意味論的分析を開始した。

２．研究の目的

パウロの神学的言明に意味論的分析を施し、無矛盾な見解が展開されていることを哲学的に吟味すること。そのうえでパウロの心身論を展開すること。

３．研究の方法

信の哲学における探求の主題は信であり、そしてそれに基づき誰もが議論に参加できる与件は主にパウロのテクストである。そのテクストは人間のとりわけ旧約聖書の長い言語使用の伝統のもとに、自らの実在体験を組み込み提示されたものであり、さらにその後の歴史においてそのテクストは異文化をも含め人間の長い分析の歴史の濾紙を通過したものである。解釈をめぐる論争は二千年になる。信の哲学においては、いかなる解釈もその基盤を受け入れた上で遂行される、その共約可能な基盤の探求に集中する。

パウロによりギリシア語の「ピスティス」という一語において表現された信実そして信仰総じて信ということがらが一体人間存在にとっていかなるものであるか、いかなる位置をしめいかなる機能をはたしているかを解明し、その作業を通じて人間存在をその全体性において理解したい。パウロのピスティスの理解をめぐり信の哲学が可能であるとすれば、それはパウロにより宣教された福音を展開するテクストの分析を介して、信じる者も信じない者も同じ言語を使う限り、すべてのひとに共約可能な(commensurable)知識を析出しうる地平が存在するからである。それは解釈作業の基本的な方向と制約を提示する。ひとは、翻訳可能性を含む広い意味で同じ言語を使用する者である限り、テクストへの意味論的分析を通じて同意に至りうる。さらに信の哲学が可能であるとすれば、それはパウロが福音を展開するテクストにおける魂の分析を介して、信じる者も信じない者も同じ魂を持つ限り、すべてのひとに共約可能な知識を析出しうる地平が存在するからである。ひとは、同じ心身の構造を持つものである限り、テクストに対し心身論という視点からの分析を通じて自らの魂の機能について同意に至りうる。そこでは一つの意味論そして心身論として他の立場と対話が可能なものとなろう。この共約可能性にこそ、信の哲学の成否がかかっている。

「共約性」とは複数のもののあいだにそれらを比較吟味する同一の規準が存在していることを言う。一般に、比較されるものごとは同一次元における類的同一性を何らかの仕方で摘出できなければ、それぞれ類似性、異他性を指摘する視点を持つことはない。例えば、火星人と地球人を比較する場合に、双方とも「生物」であるという前提を立てることになろう。日本と米国を比較するときは「国家」という共通の規準により、その差異を判別する。もし、日本とオレゴン州と英国をその人口や産業において比較するなら、カテゴリーミステークに陥る、つまり分類比較の規準を誤っていると指摘されるであろう。

共約可能性を担うものは合理性である。この概念を合理的に理解することは困難を伴うが、合理性を根源的に支えるものは矛盾律であるとすることに異論は提示されえないであろう。なぜなら、異論があるとして、その異論そのものが矛盾律に基づいてなされるであろうからである。ただし、矛盾律はあらゆる判断の究極的な根源であるにしても、それはあらゆる存在者の究極的な根源であることを意味しない。言明（ロゴス）のあるところに矛盾律に基づく合理性は関わるが、存在者やその認識に関しロゴスを伴わない魂の機能の発動の可能性が残るからである。この留保のもとに、矛盾律は理論的、実践的な種々ありうる生活形式が主張するでもあろう種々の合理性がそれにより判別される根源として位置づけられよう。人間について

の十全な理解を提供するものは当然論理次元に留まることはできないであろう。宗教的な感覚をもちその理論を作らざるを得ない人間というものの理解をめぐる思考の最低限の制約として矛盾律を確認したうえで、共約できる地平、領域を積み上げていくことが不可欠な作業となる。

４．研究成果

パウロ「ローマ書」の上記方法による分析は堅固な結果をうみだした。

前世紀末、ローマ・カトリック教会とルーテル世界連盟は長い共同研究の末に「義認の教理に関する共同宣言」(1999)に調印し、双方の和解への礎を置いた。「アウグスブルク信仰告白」(1529)および「トリエント公会議」の議決(1547)は双方ともに失効した。しかし、その内容は聖霊の力に依拠した敬虔な聖書解釈に基づくものである。それ故に共同宣言は神学的には何らか正鵠を得ているにしても、人間の責任ある自由に関する理解をあいまいにしたまま、言わば寝技に持ち込み突き詰めない解釈に終始し、厳密な理解を阻むものとなった。例えば「１６キリストを通してのみ、われわれは義とされる。信仰においてこの救いを受けるからである。信仰とは聖霊を通して与えられる神の賜物そのものである。・・２０カトリック側が、人間は、人を義とする神の行為に同意することによって、義認への準備と受容において神の義認の業に「協働する」と言うとき、彼らはそのような人格的同意そのものに、恵みの働きを見ているのであって、それを人間が自分の能力によって行う行為だと見ているのではない」と語られている。救いを受ける人の持つ心的態勢としての信仰が神による義認の理由づけとなるのは不可解に思えようが、信仰それ自身が、「賜物」つまり信じることは信じせしめられることだという恩恵の一人芝居の故に、義認の理由たりえるとされるからである。さらに協働説においても「同意」としての人間の責任ある自由は結局は恩恵に回収されるであろう。というのも、「自分の能力によって行う行為だと見ているのではない」と特徴づけられるものは何であれ「自由」の名に値しないであろうからである。このような仲間うちの党派的なジャーゴン（通語）への依存は自己満足的であり、広く一般の理解と支持を得るにはいたらないであろう。

もしヨーロッパ西方教会を二分し何世紀にもわたったこの争いが、そして諸哲学との緊張が信仰義認をめぐるテクストの誤訳ないし無理解から生じたなら、つまり一枚の紙のインクのしみが人類の歴史を左右するそのようなものであるとしたなら、歴史は一見些細な事柄により方向づけられるいかにも繊細なものであることを示している。換言すれば、テクストの正しい読解が歴史を正しい方向に導くこともできるそのような力あるものであることになる。人文学の歓びは歴史を貫いて宝とされるテクストが持つその力を知ることにある。ヴォルムスにあるルター像の礎石の一つには「聖書を正しく理解するところ、そこに聖霊が宿る」と彼の言葉が刻まれている。もちろんこれは自然科学においても変わらない。ダーウィンやアインシュタイン等は自然や宇宙というテクストに書かれたロゴス（理・法則）を発見した。人間の頭脳のロゴス（説明言表）は宇宙の創成の現場を捉えたが、それは宇宙や自然のロゴスに合致することを示している。アリストテレスやパウロのヌース（直観知）がヒットしたでもあろう人間の魂とその創造者のロゴスについても同様であり、彼らの発見がテクストとして伝達されている。彼らのテクストを媒

介にし、彼らが触れていたものに触れることが期待される。その時堅固な知識は新たな世界の基礎となる。ロゴスはこのように人類の歴史を導く力である。

聖書を翻訳において読み進めるとき、はじかれるというか、信じ込んで読まない者には到底理解できない文章の連続であるという違和感を持つ読者は多いであろう。それは単に敬語の使用というのではなく、翻訳そのものが神学上、今見たように、或る道理のある敬虔な立場で遂行されているからである。しかし、実は、彼らが依拠するパウロの「ローマ書」それ自身は、テクストの意味論的分析を施す時、啓示の次元と人間的な次元を分節しており、共同宣言よりはるかに明晰に恩恵と自由の関係について論じていることがわかる。少なくとも本研究においてはそのことを立証しようとしてきた。哲学史上、ペラギウス論争やカントの決定論と自由の第三の二律背反等もこの関係解明のための一ヴァージョンとして出来している。本研究では、とりわけ厳密であり考え抜かれたパウロの現存最後の書簡「ローマ書」において、パウロは神とひとの媒介者、神の子でもひとでもあると言われる神学的実在イエス・キリストに神の眼差しに即して眼差しを注ぎつつ、その新奇な実在に生起した福音を、信じる者にも信じない者にも等しく理解できるという意味での神の前の言語とひとの前の言語への分節のもとに、無矛盾な言語網を展開していることを、その骨格において論じた。神学的論述の背後に哲学的な分析を許す層を析出することができることは、パウロ自身が異邦人に論証を提示するさいに哲学者として思考していたからである。彼は信じる者も信じない者もひとは誰であれ同じ言語を用いるものであること、さらにひとは誰であれ同じ魂体においてあるものであることを前提にし、そのもとに双方に共約的な意味論および魂体論の構築をめざしていたからであり、そのことの論証を遂行した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　7 件）

① 千葉惠、「パウロ「ローマ書」の言語哲学―神学論争の解消に向けて―」『北海道大学文学研究科紀要』132、pp.1-47　2010 年 11 月、査読無

② Kei Chiba, Aristotle on Essence and Defining-phrase in his Dialectic, *Definition in Greek Philospohy,* ed.David Charles, pp.203-251, (Oxford University Press 2010)、査読有

③ 千葉惠、「アリストテレスの弁証術における言語哲学―本質、定義形成句そして意味表示の二重機能―」『北海道大学文学研究科紀要』130、pp.1-67　2010 年 2 月、査読無

④ 千葉惠、What is it like to be a generalist? *A Study of Healthy Being, From interdisciplinary perspectives*, ed. Wai Ling Lai et alter, Feb,2010, pp.47-65 Azusa Shuppan、査読無

⑤ 千葉惠、「アリストテレスの生命観―目的因はいかに語られうるか―」『認知神経科学』Vol.11.3・4、pp.193-202　2009 年 12 月、査読無

⑥ 千葉惠、「序説　信の哲学―ギリシア哲学者使徒パウロ―（中）」『北海道大学文学研究科紀要』128、pp.1-101　2009 年 7 月、査読無

⑦ 千葉惠、「序説　信の哲学―ギリシア哲学者使徒パウロ―（上）」『北海道大学文学研究科紀要』126、p.1-91　2008 年 11 月、査読無

〔学会発表〕（計　5 件）

① 千 葉 惠 、 2010.5.15　Aristotle on Enquiry theory and Demonstration of what it is,（Aristotle’s Metaphysics Oxford University Oriel College）、
② 千葉惠、2009.7.26 「アリストテレスの生命観―目的因はいかに語られるか」、第 14 回認知神経科学会　特別講演　（東京大学　駒場キャンパス）
③ 千葉惠、2008.11.15 「ペラギウス論争とその調停者パウロ」57 回中世哲学会、（明治学院大学、戸塚キャンパス）
④ 千葉惠、2008.10.5 Aristotle on Essence and Defining-phrase in his Dialectic,（Aristotle on Predication, Rutgers University）
⑤ 千葉惠、 2008.1.13「信の哲学」北日本哲学会、（東北大学）

〔図書〕（計　2 件）
① 千葉惠、編著『笑い力―人文学でワッハッハ』「笑いの構造―アイロニーの最大の振幅としてのユーモア」pp.204（北大出版会　2011.3）
② 千葉惠、編著『老い翔る―めざせ、人生の達人』「人生の達人とは誰のことか―徳、信仰そして永遠」pp.217（北大出版会 2011.3）

６．研究組織
(1)研究代表者
千葉　惠（CHIBA　KEI）
北海道大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：30227326

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし